

イノベーション・アーキテクト養成プログラム

(実施期間：平成 26～28 年度)

実施機関：立命館大学（総括責任者：建山 和由）

採択プログラムの概要

本取組は、「創造的チーム」を生み出せる人材「イノベーション・アーキテクト」の育成を目指す。イノベーション・アーキテクトとは、グローバル化・多様化し続ける世界に対応出来るマインドを持ち、チームを形成・牽引し、多様な価値観・情報のぶつかり合いから新たな価値を創造する力を持った人材である。様々な課程・研究科からの受講者を対象に、チームでの活動を原則としたPeople-Based Learning (PBL) を実施する。学内や企業・団体のシーズ/ニーズに基づき、1 年間で3 期に分けて、課題抽出、課題形成、課題解決のサイクルを回す。実業家・教員の指導のもと、多様な価値観・考え方が交差するスクランブルを設定して新たな価値創造を経験する。本プログラム修了生が、社会に出て、学んだことを実践していく中で、そのマインドとスキルが人から人へ広がっていく増殖型イノベーション・エコシステムの構築を目指す。

(1) 評価結果

| 総合評価 | 目標達成度 | 成果 | 計画・手法の 妥当性 | 補助事業期間 終了後における 取組の継続性 ・発展性 |
|------|-------|----|---------------|-------------------------------------|
| A | a | a | a | a |

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

PBL を主軸とした独自プログラムを開発・実施している。企業の実課題に対して社会人も入った文理融合のチームでソリューションを考えるプログラムや、国際学生と日本人学生の合同チームでデザイン思考に基づくビジネスプラン構築を行うプログラムにて、課題発見・課題設定から始めて行動変容をもたらすことを目指した取組を行い、計画を超える受講者が参加していることは評価できる。立命館の各拠点で連携して同一内容の事業を進めたことや、社会人受講者を巻き込みアドバイザーやメンターとして活用すること、また個別企業の実課題に基づいたプログラムを開発する取組を実施していることは評価できる。

・**目標達成度**：PBL を主軸とした独自プログラムを開発・実施している。受講者数は PBL プログラムは自らの目標の約 2 倍の 323 名、講座型プログラム等と合わせて延べ 983 人と目標を大幅に達成している。参加企業・連携企業数の目標も達成している。留意事項に記載のある近隣の滋賀医科大学との連携は適切に対応しており、総じて、所期の目標を達成していると評価できる。

・**成果**：立命館アジア太平洋大学を含む3キャンパスの学部・研究科及び他大学・社会人を受け入れた文理融合チームで実践的なPBLプログラムを実施している。国内外の多様な民間企業、団体、地方自治体など50を超える機関との連携を強化し、個別企業5社の実課題に基づいたPBLプログラムを計6回実施していることは評価できる。受講者に占める大学院生および若手研究者の割合は要件を満たしていないが、これは学部生の受講者の増加によるものであり、受講者数は目標を達成している。起業事例は1例で、受講者総数を考慮するとやや少ないが、今後、社会人の参加を増やして多様性を活かすことで伸びが期待できる。

・**計画・手法の妥当性**：教学担当常務理事を委員長として産学官連携本部、デザイン科学研究センター等から選出された教員、外部有識者で構成されるプログラム実行委員会が事業の運営・推進を担っている。2週間に1回の頻度で全体調整を実施し、外部評価会での事業の評価、指摘やアドバイス、及び受講者の受講前後の自己評価、受講者の声に基づき、迅速かつ柔軟にプログラムを改善していることは評価できる。補助金額に対して十分な成果を上げており、今後は事業全体の改善や他大学への普及やノウハウの共有について能動的な活動を期待する。

・**補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性**：平成29年度事業計画や2020年を目指した中期計画「R2020」等において、EDGEプログラムの継続が全学的に承認され、プログラムの継続や新規企画が計画されていることは評価できる。平成29年度には全学横断組織として「イノベーション共創センター（仮称）」の立ち上げやクラウドファンディングなどを予定し継続性・発展性が期待できる。今後は、正規科目化等の制度上の整備計画、資金計画等を具体化することを期待する。